すばらしき新世界と機械仕掛けの神々

クロススケア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すばらしき新世界と機械仕掛けの神々

【Ｎコード】
Ｎ４５２０Ｔ

【作者名】
クロススケア

【あらすじ】
破壊と滅びの世界より舞い降りたのは、機械で形作られた神。
少年は出会う……
最強の山猫と……
これは、鴉と山猫が織りなす、戦いの物語である。

注１：かつてこちらに投稿していた物を大幅変更して投稿しています。
注２：作者名、作品名が違うのは仕様です。
注３：もう一つの作品の注意書き（の大半）はこちらにも適応されます。
注４：荒らしはするなよ。
注５：荒らしが酷い場合は作品削除後、非公開設定で再構築します。
注６：所々時間軸が飛んでいたり、映写が抜けている点がございますが、そこら辺は脳内補完でカバーしてください。
注７：もし改定前のが読みたい場合はメッセージ等で言っていただければ公開するかもしれません。

第0話「Entrance to the New World」（前書き）

基本的に主人公は一夏です。

因みにORCAルート準拠。

第0話「Entrance to the New World」

「成就しろよ、お前の答えを……」

幾度となく通った道。

「貴様も、人類のためには人の死を厭わないか。ならば自分で、死を実践してみせろ。テルミドールと同じようにな」

幾度も死を見た。

「クローズ・プラン、第一段階完了か。今や、お前だけがＯＲＣＡだ」

幾度も、未来を切り開いた。

「１つの生命を思う、それを愚かと呼ぶか。歪んでいるよ、貴様も、この世界も」

「だが、再びここに戻った……」

真っ白い世界。

この何もない世界で彼はずっと一人だった。

「また、リンクス戦争からやり直しか……俺はいつまでここに居ればいいんだ？」

男はずっとここにいた。
既に幾千幾万とあの地で戦い続けていた。

「いい加減さっさと解放してくれないかね……」

最初の戦いなど、既に記憶が擦り切れて覚えていない。
いつからここにいて、いつまでここにいるのか、彼には分らなかった。
死ぬと、再びこの地に戻されて、扉が現れるまでここに待機させられていた。

「また、扉か……」

再び現れる扉。
その扉を潜れば、彼は再びリンクス戦争前の地球に戻される。
しかし……

「二つ？」

現れた扉は、二つだった。

一つは金属製の大きな扉。
潜れば、リンクス戦争……果てはカラードとＯＲＣＡ旅団の戦いまで発展する、ルートによっては救いの無い世界。

だが、もう一つの扉……木製の小さな扉。
見覚えなど、無かった。

「さて、どちらを選ぶべきか……？」

いつも潜る金属の扉と、新しく現れた木の扉。
答えは、決まっていた。
「いい加減、汚染された世界での戦いは、飽きた。新しい可能性に賭けて見るのも、悪くない」
立ち上がり、木の扉のドアノブを掴む。
「見せてくれ、俺に新しい世界を……」
扉を潜り、その向こうに消えていく男。

そして、誰もいなくなった……
残されたのは、潜る者がいない木の扉だけだった……

行ったか……
彼の戦闘経験は十分蓄積されました。後は、亡霊を倒すのみ……
世界は我々が管理する……
この世界に、イレギュラーは不要だ……
インフィニット・ストラトス、亡霊が生み出した世界を乱す物……

今度は、我々がそれを使って秩序をもたらす……

熾天使の完成を急がせろ。亡霊が、アレの封印を解く前に……

第0話「Entrance to the New World」（後書き）

次回、原作介入開始？

第1話「Day of reunion」（前書き）

ここら辺は前と変わりません。

ちょっと文を変えた位ですね。

第1話「Day of reunion」

「遅い……」

都内のカフェで一人の少年が10杯目の紅茶を飲みながら呟いた。
彼は、掲示板で見つけたとある書き込みを見てこの場に来た。

【山猫は六柱三面の頂に集う】

「かつてカラードの面子が使っていた集結用暗号……それが何故、この世界で……」

第1話「Day of reunion」

11杯目の紅茶を店員に頼んだ男は、ぐでっとテーブルに倒れ伏した。

「やっぱり偽情報かな……学校休んだ意味無いじゃないか……」

情報に踊らされて皆勤賞が達成できなくなった事が彼にとって心残りだった。

「……帰るか……」

代金を支払いに席を立とうとした瞬間……

「その必要はありませんよ、レヴァン様」
「誰だ……」
男……レヴァンの前の席に座った空色の髪の女性。
「その声……リリウムか……まさか貴様が此処に来るとはな……」
「現在一番近かったのが私だったので」
来た時に頼んでいたのだろう……紅茶を飲みながら答えるリリウム。着ている服……白いサマードレスを纏った彼女が紅茶を飲むシーンはとても絵になる。
「で、リンクス……俺を此処に呼び寄せた理由はなんだ？」
「それは、貴方が一番よく知っているかと。最後のＯＲＣＡである貴方なら……」
リリウムの目が鋭く光る。
「今のこの世界の現状……そしてカラード・ＯＲＣＡ関係無しにリンクスを呼び寄せた訳……それは……」
「インフィニット・ストラトスか……」
「その通りです、レヴァン様」
その時、店員がケーキを二つも持ってきた。
リリウムは甘党だっけか？と考えていると、ケーキの一つが自分の前に置かれた。
「俺はケーキを頼んだ覚えは無いのだが……」
「そちらのお客様からです」

店員の答えにリリウムをみると、ニコリと頷く彼女。
「成程……では、お言葉に甘えよう」
ケーキ……リリウムの奢りだと判断したレヴァン。
「で、話を続けようか」
「そうですね……では、ＩＳによって世界情勢が大きく変わったのはご存じですね」
真剣な顔つきになるリリウムとレヴァン。
「女尊男卑……ＩＳを動かせないが故に男性の価値は低下の一途を辿っている」
「テルミドールの言葉を借りるのはアレですが……このままでは人類は定款の内に壊死するでしょう」
「そこら辺は納得だ」
切り分けたケーキを口に運ぶレヴァン。
「で、俺に何をさせたい？今更”あちら側”の因縁を持ち込む訳でもあるまい」
「その前にお聞きします。貴方はコレを持っていますか？」
そう言いながらリリウムが見せたのはドッグタグだった。
それも、カラード時代の所属企業と機体名、登録ネームが書かれた物。
一応レヴァンも持っている。

但し、国家解体戦争後……所謂リンクスにＮｏ．が振り分けられていた時代。

「あぁ……これの事か」

レヴァンのドッグタグにはＮｏ．２３という文字と、ローゼンタールのエンブレム。

「貴方、オリジナルだったのですか？」

驚きの声を上げるリリウム。

「一応な……但し、ある事故でリンクス戦争時は殆ど眠っていたがな」

あの日の事を追懐するレヴァン。

「なら、これが何かご存じですね」

「あぁ……コイツは……」

『インフィニット・ストラトスだろ（です）』

二人の山猫の声が重なった。

「では、これで話は終了だな」

「そうですね。やはり貴方も変わっていませんでした……王大人の読みは当たっていました」

あの陰謀爺が？と心の中で思うレヴァン。

「変わっていない？それは違うな、リリウム・ウォルコット」
「えっ！？」
「俺の今の名は……」

「レヴァン・Ｌ・織斑だ」

最後のＯＲＣＡと女帝は出会い、山猫達が動き出し始めた。
世界初の男性ＩＳ操縦者……『織斑一夏（おりむらいちか）』の存在が全世界に公開される三年前の事であり……
第二回モンド・グロッソ開催一週間前の事だった……
そして、世界を揺るがしかけたある事件も……

第1話「Day of reunion」（後書き）

作者の考えですが、第二回モンド・グロッソは日本で開催されたと思っております。
そして、ドイツ軍が一夏の居場所を発見したと原作にありましたが、これは代表達に同行していた特殊部隊が発見したと解釈しています。
尤も、一夏が誘拐されてドイツまで運ばれた→その事をドイツ軍が知った→千冬に情報提供→千冬試合放棄という考えもアリですが。

第2話「SWARMS OF RED EYE」（前書き）

NGは削除、代わりにちょっと追加しました。

タイトルは勘の鋭い方はわかるかも……

第2話「SWARMS　OF　RED　EYE」

リリウムとの再会から一週間後……

「一夏を狙っている……何故！？」

現在織斑家は謎の敵対勢力の襲撃を受けていた。

第2話「SWARMS　OF　RED　EYE」

「レヴァン兄さん……」

「安心しろ一夏、もうすぐ助けが来る。それまで耐え抜くんだ！」

ドアの隙間からショットガンの銃身だけを出し、発砲。

狙いを定めない出鱈目な発砲だが、それでも牽制程度にはなる。

「千冬姉さんがいないというのに……！」

現在千冬姉さん――『織斑千冬（おりむらちふゆ）』は第二回モンド・グロッソに出場している為、この場にはいない。

その為……

「無駄な抵抗するんじゃないよ！！」

ガトリングガンを乱射しているISに対して決定打が与えられない

のだ。

レヴァンのＩＳが内蔵しているセンサーの情報では少なくとも後五機のＩＳが存在する事が判明している。
しかし、現在レヴァンはＩＳを使えない。
その理由は一夏の存在である。

現在一夏はレヴァンが守っている状態。
敵はＩＳだけでは無く、歩兵戦力もいる。
ここでレヴァンがＩＳを起動させれば間違いなく全ての敵ＩＳの攻撃がこちらに向く。
そうなれば一夏の命が危ない。
また、歩兵戦力によって一夏が殺害もしくは誘拐される可能性もある。

既に織斑家は見るも無残な状態。
二階は撃ち込まれた榴弾で崩壊。
一階もレヴァン達が立てこもっている一室以外は大量の銃弾の雨霰を受けている。
更に悪い情報として、これだけ大騒ぎになっているにも関わらず、国のＩＳ部隊はおろか警察の一人すら来ない。
尤も、警察官が来た所で瞬殺されるだけだが……

「万事休すか……」

レヴァンが呟いた瞬間……

「どうした？仮にも私達を率いた旅団長なんだろ……」

レヴァンの耳に聞こえた懐かしい声。

同時に何かが倒れる音、そしてあれほど響いていた歩兵戦力の銃声が止んだ。
恐る恐るドアの隙間から顔を出すと……
「……絶対防御を過信しすぎたな」
先程までガトリングガンを乱射していたＩＳパイロットが事切れていた。
絶対防御ごと頭部を撃ち抜かれた事による、即死だった。
「無事か、レヴァン？」
「あぁ…無事だ、ジュリアス」
レヴァンの前に現れたのはかつてＯＲＣＡ旅団に属していたリンクス……現在ＩＳ『アステリズム』を纏った『ジュリアス・エミリー』だった。
見た目は他のＩＳと変わりないが、各部のパーツにネクストの面影が残っている。
ＭＳ少女と言えば分かるだろうか。
そんな時、レヴァンのＩＳが接近する複数の友軍機を確認した。
「リリウム、ウィン、ローディ、王小龍、メイ、エイ・プール、メルツェル、ハリ、ネオニダス、真改、ヴァオー……なんだこの編成」
カラード、ＯＲＣＡ混成のネクスト部隊。
かつてのレイレナードネクスト部隊も真っ青な編成に流石のレヴァンも呆れた。

「というか明らかにこの戦いに不適格な奴が混ざっているのは仕様か？」

主にエイ・プールやネオニダス、ヴァオーが。

「仕方あるまい、状況が状況だ。今は誰一人としてリンクスを欠かす訳にはいかないからな」

「だからって此処に近い連中を軒並み引き連れて殲滅戦を展開するか？これが千冬姉さんにバレたら俺達は怒られるだけでは済まないぞ」

現在の状況

織斑家周囲は瓦礫の山と化しています。

主にとある三人の攻撃のせいで……

「こりゃ住むのは絶望的だな」

何故か今日、自分達を除くこの町の住人が旅行に出かけた為、人的被害はほぼ無いに等しい。

しかし、旅行から帰ってきた住人達がこの光景を見たら何と言うだろうか。

この惨状にショックを受けるのはまず間違いないだろう。

「安心するがいい、既に根回しは済ませた。これは”煙草のポイ捨てによる火事”として済まされるだろう。そして、こいつらは火事の哀れな犠牲者として処理される」

「流石王小龍……やる事がエゲツない」

なんとも最悪な煙草のポイ捨てである。

「でだ、レヴァン。そこの少年の自己紹介を頼む」

真紅のゴツいＩＳ……『フィードバック』を纏ったＧＡ最強のリンクス『ローディ』がドアの隙間からこちらを伺う少年……一夏を見つけた。

「説明がまだだったな、コイツが俺の義弟の一夏だ。あの織斑千冬の血筋だ」

安全と言う意味のハンドサインをしながら一夏を呼ぶレヴァン。
最早ドアとしての役目を果たしてない物体を押し退けて部屋から出る一夏。

「安心しろ、コイツ等は皆”良い奴”だ」

未だに警戒している一夏を安心させる為の台詞。
少なくとも後数十年は敵対する事のない相手。
あながち間違いではないだろう。

ＯＲＣＡは、かつての世界で人類の道を切り開く為に、あえて悪役の道を歩む事を選んだ。

――地位も名誉も不要――

『安全だが腐敗していく世界』よりも『苦しくとも未来を夢見れる世界』を望んだ彼らは、この世界もまた、かつての世界のようになる事を悟った。
カラードの山猫達もまた、この世界で滅びを、腐敗を見た。
故に、彼らは自らの矜持に従い、手を組む事を選んだ。

全ては人類を護るために……

「そう言えば、千冬姉の試合どうなったんだ？」

『あっ……』

余談だが、千冬は一夏襲撃事件について一切知る事なく、決勝戦を終わらせた事をここに追記しておく。

第2話「SWARMS　OF　RED　EYE」（後書き）

その後、焼き払われた街を千冬が見てどのような反応をしたかは、皆さまのフロム脳にお任せします。

少なくともコジマ汚染は無いです。

第４話「Ｐｒａｙ」（前書き）

原作崩壊始まるよ！

第４話「Ｐｒａｙ」

一夏誘拐（襲撃？）未遂事件から５ヶ月……
焼き払われた街は再建され、人々は再び平穏な暮らしを手に入れた。
この事件は、死者を１００人以上出した火事として処理され、真相は闇に葬られた。
一部の人々を除いて……

インフィニット・ストラトス　新世界の機神達
第４話「Ｐｒａｙ」

誘拐（襲撃？）事件から一週間後、一夏は突如通っていた中学校を休学した。
理由は至極簡単……

「世界を知るべきだ、一夏。今この世界がどんな姿なのか、自分の目で見極めるんだ」

兄であるレヴァンのこの一言が切欠だった。

白兎が元凶で歪み始めた世界をその目に焼き付ける為、一夏はレヴァンと共に世界を廻った。

ＩＳ推進国であるイギリスを訪れたのは、旅を始めてから５ヶ月後の事だった。

そこで一夏は一人の少女と出逢う。
正史において蒼雫のパイロットとなる”箒”だったあの少女に……

「ようこそ、イギリスへ」
「暫く世話になるぞ、リリウム」
「よろしくお願いします」

イギリスのとある駅。
レヴァンと一夏はリリウム・オルコットの歓待を受けていた。

「で、そっちは何かありましたか」
「いや、特に何もない。強いて言うならどこぞの馬鹿野郎が幼馴染に手を出そうとした所か」
「それで、その”馬鹿野郎”はどうなりましたか？」
「基地一つ吹き飛ばしてやった。今頃”龍”の再生に大慌てだろうな」

車でオルコット家に向かう途中、レヴァンとリリウムはこれまでの事について話していた。
一夏は疲労が溜まっていたのか、後部座席でぐっすりと眠っている。

「フフ……予想ですが貴方には簡単過ぎる”仕事”だったでしょう」
「あれで軍の主力と言うか、笑わせる。まだ”あちら側”のノーマル部隊の方が強いよ」

レヴァンの脳裏にはたった一機のＩＳに翻弄される７機のＩＳの姿が浮かんでいた。

「今度はこちらの番だ、そっちは何か変わった事があったか？」
「……その事について話があります」
リリウムの表情が硬くなる。
何かあったと当りをつけたレヴァンは「そうか」と一言呟いただけだった。

オルコット家の屋敷。
名門というだけあって、かなりの大きさ。
しかし……

（銃撃戦の跡？もしや、これがリリウムの……）

壁や庭のモニュメントの一部に弾痕があった。
他にも屋敷の一部がブルーシートで覆われていたり、いくつかの花壇が荒れていた。

（どうやら、事態は深刻みたいだな……）

車内でリリウムが見せた表情を思い出しながらレヴァンは一夏を伴って屋敷の中に入っていった。
その後、一夏は割り当てられた客室に案内され、レヴァンはリリウムのいる部屋へと向かっていった。

リリウムの部屋。
レヴァンとリリウムはテーブルを挟んで向かい合うように座っていた。

メイドがいたが、リリウムの指示で現在部屋の外に待機している。
「では、話して貰おうか。あの”事件”の後……帰国してから何があったのかを……」
リリウムの口から語られる五ヶ月間の話。
話の間レヴァンは一切口を開かなかった。
そして……
「成程……妹が襲撃されたと。だから”荒れて”いたのか」
「その通りです。何が理由なのか、皆目見当もつきません」
「セシリアだっけか……彼女には何か素質でもあるのか？」
「いえ、常人よりＩＳ適性は高かったですが、それだけです」
予想以上に深刻な事態。
レヴァンにはそれが理解出来た。
「一夏に続き今度はセシリア……この二人には同い年である以外共通点はなかった筈だが？」
「はい、だから謎なのです」
「襲撃者は軍人崩れに所属不明のＩＳ……一夏の時と同じだな。何か進展は？」
「”国”からはこれと言った情報は来ておりません。ですが、ＯＲＣＡから興味深い情報が来ました」
そう言いながら一冊の書類を見せるリリウム。
「どういう事だ……何故一夏にＩＳ適性があるんだ？」
中身を見たレヴァンの表情が驚愕に形作られた。

「まだＤＮＡチェックの段階ですが、ほぼ間違いないでしょう。恐らく『篠ノ之束（しののたばね）』博士の仕業かと」
「例えそうだとして、一夏にＩＳ適性を与える意味がわからない。何を考えている、あの博士は」
「多分、何も考えていないのでしょう。彼女は愉快犯の気質がありますから」
「ったく、面倒が増える……で、これとセシリア襲撃に何の関係があるんだ？」
「それですが、実は一夏君がＩＳを動かせるのではという噂がイギリスの軍部に流れていました。それも、セシリアが襲撃される前日に。噂が流れた次の日に襲撃……とても偶然とは思えません」
「確かに……」

沈黙が、場を支配する。
その沈黙を破ったのは、リリウムの一言だった。

「そこで、貴方に頼みがあります」
「ん？」

リリウムの頼み、それを聞いたレヴァンは思わず己の耳を疑った。

「私の大切な妹……セシリアを、貴方達の”旅”に連れて行ってくれませんか」
「……何故？」

トンデモ発言に一瞬フリーズするレヴァン。
しかし、そこは歴戦の傭兵。
すぐに再起動する。

「正確にはセシリアをイギリスから脱出させて欲しいのです。現在彼女は狙われており、再び狙われる可能性は十分にあります。貴方が一夏君を旅させているのは、襲撃者から彼を守る為ですね」
「……成程、そこまで把握していたか……流石は王小龍の懐刀、一発で見抜いたか」
「心眼は鍛えていますから」

レヴァンが一夏と旅する理由を一発で見抜いたリリウム。

「だからこそ、貴方にセシリアを守って欲しいのです。『最後のORCA』と、『最強の山猫』と云われた貴方に……」
「……」
「私は、貴方に託したいのです。セシリアの未来を。何れ私達『山猫(クス)』はこの世界に対し、革命を起こす。かつてマクシミリアン・テルミドール(リン)がやったように……」
「だが、俺もその戦いに参加する。その場合はどうするんだ？」
「貴方の事ですから、きっとこの旅で一夏君に護身術とか教えているのでしょう。何れ、私達が革命を起こした時、一人で生きられる様に」
「ぐっ……何でわかったんだ？」
「あちら側の時から私は貴方について調べていました。貴方の師が旅をしながら訓練していた事、エーレンベルグ攻防戦の時にワザと私の機体のコアを狙わなかった事など……」
「マテ、関係無いのが混ざっているぞ！……まぁ、事実だが」
「否定はしないのですね……」

若干顔を赤らめるレヴァン。

「ともかく、私は貴方にセシリアを託したい。それが、最良の未来に繋がると信じているから」

「死ぬかも……知れないぞ」
「貴方が死なせるとは思えません」
「……」
「この前セシリアについて、とある占い師が私に言いました。『答えを求める者に、その者を託せ。さすれば、自ずと道は開ける』と」
真っ直ぐレヴァンの瞳を見つめるリリウム。
「答えは……？」
レヴァンの”答”は、決まっていた……

その日、一夏に”家族”が増えた……
本来ならまだ出会う事の無かった二人……
史実は歪み、物語は全く別の方向へと進み始めた……

第４話「Ｐｒａｙ」（後書き）

次回はお茶会が入ります。

後、一夏はＩＳ学園に入学しません。

襲撃するかもしれないが……

第5話「ＯＲＣＡ」（前書き）

スキル「脳内補完」が必要になる話かと……

そして、衝撃のラストが……

後、シャルロッ党員の皆様……ごめんなさいｏｒｚ

第5話「ＯＲＣＡ」

別れの時が来た……

「それでは、お願いします」

「任せろ」

レヴァンとリリウム。

かつて敵同士だった二人が、握手していた。

「セシリア……たとえ離れ離れになっても私は貴女の事を思っていますからね……」

「……ありがとう、リリウム姉さま」

セシリアを抱き止めるリリウム。

その光景を一夏とレヴァンは見守っていた。

第5話「ＯＲＣＡ」

「さて……どう見る？」

「現状ではＩＳを上回る兵器は存在しない。そして代用の兵器も……」

円卓で交わされる議題。

それは彼らの目的を果たすための会議……

「で、どうするつもりだ」
「こちら側には”山猫”以外にも、多数の技術者や科学者が来ている……あちら側の記憶を持ったままな」
初老の男性が、複数の写真を見せながら説明を続ける。
「彼らには二年前の戦闘で手に入れた１２個のＩＳコアの解析及び増産を依頼させる」
「４６７個の内の１２個……何れも他国に登録されていた代物。一体どこの連中だ？」
「調査の結果、奴らの所属は亡国機業（ファントム・タスク）というらしい」
猛禽類の様な眼をした若い女性がコンソールを操作して、円卓の中央に置かれた立体投影式ディスプレイを起動させる。
「活動目的、規模などは一切不明。唯一分かっているのは各地でＩＳ強奪と素質のある人間もしくはその関係者の誘拐を行っているという事だけだ。王大人が手塩にかけて育てた諜報部員ですら追跡が困難と来た」
実際には諜報部員の半数は亡国機業側のＩＳと思われる機体によって殲滅させられている。
「それだけ巧妙に秘匿されているという事だ。それに、亡国機業側にもリンクスが混じっている……認めたくないが……」
「何だと！？」
ざわつく議場。

「連中に殺られた諜報部員の中にはネクスト用兵器と思われる攻撃跡があった。偶然捉えられた映像にも真紅のレイレナード系ネクストタイプのＩＳを扱う女性が確認されている」

暫し、鎮まる。

そして……

「内通者の可能性は？」

「メンバーの中に血をぶっかけた様な赤いアリーヤを使う女性リンクスはいるか？」

「……いないな……」

「少なくともカラードとＯＲＣＡに属していたリンクスで赤いアリーヤを使っているのはハリ以外いないが、当の本人は特異体質で集団戦推奨状態だからあり得んな」

「全くだ……」

何とも言えない空気が議場を包む。

「とりあえず、亡国機業に関しては見つけ次第捕獲、不可能なら抹殺の方向でよろしいかな？」

『異議無し』

「それでだ、全員の耳に入れておきたい事がある」

「なんだ？」

「最近、何処の国にも属してない未確認の人型機動兵器が宇宙開発関連企業を襲撃しているのが確認されている」

男の口から出た言葉は衝撃的だった。

「未確認？」
「そうだ、正確にはＩＳに似た機動兵器と言った所か」
『……』
「両手でホールドするタイプの大型プラズマライフルを構えた白い機体、漆黒のブースターユニットを装備した赤と黒で塗装された機体……妙な事にどれもＡＣをベースにしている」
「ＡＣだと？」
「そうだ、ネクストとは似ても似つかないが、あれは間違いなくＡＣだ」
そんなバカなという様な雰囲気が議場を包む。
「……未確認ＩＳに関しては、残骸等を回収して解析するしかないな」
「その通りですね」

「それでは、今回の議論はここまでという事でよろしいかな？」
『意義無し』
あの後複数の案件を処理した彼ら。
全員が立ち上がると、一斉に黒髪朱眼の青年の方を向く。
そして……
『人類に、黄金の時代を』
全員の声が、揃った……

六ヶ月に渡る旅を終わらせて日本に戻った一夏達。
様変わりした街、変わらぬ人達、生まれ変わった我が家、そして……

「お手伝いします、レヴァン様」
「すまんな、チェルシー。それと様付けしなくていいからな」
「すみません、つい癖で……」

「ここが……わたくしの部屋ですか？」
「前の家と違って狭いかもしれないけど……」
「その点については気にしませんわ」

新しい家族の存在があった。

強行軍スケジュールで世界各地を回った一夏。
とはいえ、学業を疎かにしていた訳ではなく、遅れないようきちんと勉強を続けていた。
その甲斐あってか、無事に進学が認められる事になった。
因みにセシリアは一夏と同じ中学校に編入する事になるのだが、その際幼馴染の一人と壮絶な喧嘩を繰り広げたのは、誰も予想できなかったとさ。
そして、あっさり仲直りして親友同士の間柄になるのも……

その光景を見ていたとある男子達は後にこう語る。

「女の子って、よくわからん……」
「安心しろ、俺もわからんから……」

余談だが、正史にあった幼馴染こと『凰鈴音（ファン・リンイン）』が中国へ帰国するイ

ベントが起きる事は無かった事をここに追記する。

フランスのとある片田舎。
いつもならのどかな雰囲気溢れるこの街が、今は火の海に包まれていた。

「母さん、母さん！！」

燃え盛る街、崩れ落ちた瓦礫。
そんな中、少女が息絶えた女性の身体を揺すっていた。

「どうして、どうしてよ！！」

少女の目には涙が溢れていた。

――ターゲット排除完了、帰還する――

その時、ノイズ混じりの声が彼女の耳に聞こえた。

声の主を見た瞬間、少女の表情が憎しみに染まる。
何故なら、その主が、この街を破壊したのだから……

紅と黒のツートンカラーに塗装された全身装甲のＩＳ
右腕にライフル、左腕にブレード、背中にミサイルランチャーとグレネードランチャーを装備した機体
蒼に輝く線状のカメラアイ

「許さない……！！」

地獄の底から響くような、怨嗟に満ちた声。

「許すものか……！！」

少女が叫ぶ。

元凶の名を、母が死ぬ間際に教えたその名を……

「ナインボール！！」

その日、少女『シャルロット・テレジア』は、母を失った。

後に少女はデュノア社社長に引き取られ、そこで”金の斧”を生み出す存在になるが、その事を知る者は誰もいない……

第5話「ＯＲＣＡ」（後書き）

と言う訳でシャルＭＯＡ主人公化（爆）
そしてナインボールはＡＣＮＢ仕様となります。

金の斧というフレーズはとある童話のアレから来ています。
更に言ってしまうと、空のＡＣネタ。

次回は藍越学園入学＋一夏ＩＳ適性判明かな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4520t/

すばらしき新世界と機械仕掛けの神々

2011年6月26日12時51分発行